

意見・要望等（要録）

1編 はぐくみ 「未来を拓く人がはぐくまれています」

第1章 安心して子どもを産み、育てることのできるまち

- (1) はぐはぐ Oomuta は、とても良い制度なので、地域包括支援センターのように各地区公民館にも設置されることを期待する。
- (2) 「安心して子どもを産み育てられるまち」となるには、行政が今以上に出産支援や育児支援に積極的に取り組み、それを発信することが必要と考える。
- (3) 子育てを学ぶ機会の充実とあるが、大牟田には動物の命を大切にしている動物園があるので、動物園を使った学習を考えてはどうか。
- (4) 待機児童ゼロであっても、保育の質が低下してはいけない。特に学童の支援員は常に人手不足であるため、市としても支援などの対応をしてほしい。
- (5) 子育てと仕事の両立には病後児保育が不可欠と考える。
- (6) 出会いの機会の創出に向け、民間でどのような取り組みが行われるかを把握した上で、積極的に取り組んで欲しい。

第2章 持続可能な社会の創り手を育成する学校教育が充実しているまち

- (1) ESD については広報等で確認できるが、ESD の取り組みを学校で取り入れてから何年か経っており、子どもたちが様々な経験をする中、生徒たちがどのように変わってきたのか。そうした PR もお願いしたい。
- (2) 小学校から英語教育を開始しているが、中学校に入ってから学力は以前と比べ上がっているのか。小学校から英語教育を行うことで、発音や学習の呑み込みも早いのではないか。
- (3) 中学校において高校を選ぶ際など、キャリア教育として様々な職業に就いた大人と対話できる時間がもっとあればと感じている。インターン、職場体験もあるが、もっと日頃からマッチングを行えるよう、行政と商工会議所などで取り組みを強化してほしい。
- (4) 中学校から市外に出たり、高校で市外に出たりと、大牟田を離れている現状がある。できるだけ、高校までは大牟田で教育を受けて欲しいので、魅力ある学校教育として充実させてほしい。小中学校の連携にとどまらず、難しいかもしれないが、PTA などを巻き込み一歩進んで中高連携にチャレンジしてもらいたい。
- (5) 子どもの数が減少する中、学校再編時に不安があり、私立中学に進学する家庭もあった。その不安を取り除くことも課題と考える。
- (6) 少子化の中において、この施策は大変重要であり、市の予算も重点的に配分する必要があると考える。ICT の活用も重要。

- (7) 最近クローズアップされている引きこもりの原因は、子どものころからの教育の大切さが関係していると感じる。いじめや不登校を含め、十分な対応をお願いしたい。
- (8) ヨーロッパの小学校では日本よりも地域との連携は進んでいる。地域人材を活用して保護者の気持ち（負担）を軽減していくことが必要。地域にお住まいの方々は様々な人生経験者であり、もう少し地域に委ねてはいかがか。

第3章 専門的な教育の機会が確保され、高等教育機関等との連携や交流が進むまち

- (1) 市内の学生が取得した特許をどう活用するかという施策が必要ではないか。
- (2) 帝京大や高専はボランティア活動が盛んで、観光協会等と協力して事業をやることも増えてきた。学生たちにさらに情報提供がなされることを願っている。
- (3) 市内の高等教育機関等の卒業生たちが、大牟田で就職して、結婚、子育てをし、老後も安心して暮らせるよう、しっかりと取り組んでいただきたい。
- (4) 大牟田の中高生に看護師になる道があることを認知してほしい。

第4章 未来に向けて、ともに学び、地域で行動する人がはぐくまれるまち

- (1) 公民館に子ども会があるが、公民館加入率も下がってきているし、何かイベントをしても子どもの参加があまりない。参加の後押し等を行政で何か出来ないだろうか。
- (2) 地域の取組みに参加する子どもは公民館加入世帯の子どもがほとんどで、なおかつ、手伝いに来る保護者やボランティアの人も同様に公民館役員ばかりの状況である。もう少し保護者に浸透させ、多くの子どもの参加を促してほしい。
- (3) 高校卒業後、就職や大学進学で県外に移り住む構図があると思うが、Uターンしてもらい、就職・結婚・子どもを育んでもらい老後を過ごしてもらうことを念頭に、もっと大牟田に移住・定住するメリットを打ち出し、大牟田の魅力を示す必要があると考える。
- (4) 子育て世代への支援が脚光を浴び、人口が増えている自治体がある。そのような自治体の取組みを研究し、事業の組み立てを考える必要があると考える。
- (5) ESDは地域の中での活動が根本になるが、ESDを理解している人が少ないのではないかと感じる。ESDの取組みを広げていくために、実際の活動を通じて説明していくとか、もう少しわかりやすい言葉で置き換えていくといった工夫をして頂けないか。
- (6) 視点1には、大蛇山祭りなどの様々なイベントを通じて子どもをはぐくむという意味を込めて、固有のイベント名を入れても良いのではないか。

第5章 スポーツを通して生きがいになり、活気にあふれるまち

- (1) 健康づくり市民大会やチャレンジデーなど、様々な取り組みを行っているかと思う。具体的なイベントを書き込んだほうが、市民にも分かりやすいのではないか。
- (2) 5章は、市民が健康に過ごして明るく、ということが趣旨かと思うが、スポーツを通してどのようなまちづくりをしたいかという未来像まで記載したほうがいいのではないか。
- (3) 体育館など施設が老朽化する中、スポーツツーリズムやスポーツ大会誘致など、遠方から人を呼び込み、外貨を稼いで、交流人口も増やしていくといった、スポーツでまちづくりを行っていく視点も重要であると思うので、いろいろな制約があるのだろうが、そこをお願いしたい。
- (4) スポーツを通じて子どもたちがワクワク感を持つことで、未来が明るく見えるようになるだろうと思う。子どもたちの未来に向けて皆がワクワクするような事業を考えてほしい。
- (5) 体育館をはじめ、スポーツ施設の老朽化も進んでいる。予算の制約はあると思うが、体育館は災害時の拠点となるべき施設でもあるので、しっかりと対応されたい。

第6章 文化芸術に親しみ、心豊かに生活できるまち

- (1) 文化財に登録されていない所や神職がいないところでも、特徴のある神社仏閣が本市にはたくさんあるので、注目していただければと思う。
- (2) 世界遺産登録から3年が経過し、日本全国各地で世界遺産が増えてきている。大牟田市の風土を活かしたイベントなど、今後の展開について、地域と一緒に頑張っていただきたい。
- (3) まちづくり市民アンケートの結果で、文化芸術が大事だと思う人の割合が少ない。その意識をどのように変えるかが課題だと考える。
- (4) わくわくシティ基金を活用した事業が創設されたと聞いているので、特に若い人を育成する部分に明かりがあたるようにしていただきたい。
- (5) 大牟田では日本フィルの演奏会等があり、音楽が盛んな印象だが、若者が音楽を演奏できる場が減ってきたという声も聞かれる。文化会館の旧レストランだった場所で若者が安価に演奏できるようにしていただきたい。

第7章 一人ひとりの人権が尊重され、男女が生き生きと暮らすまち

- (1) 女性参画の推進に向け、今後も引き続き頑張っていただきたい。
- (2) 地域では、現在でも女性に対する古い考えを持つ人が多いと思う。女性に対する考え方が変わるように、地域等への意識啓発を行っていただきたい。
- (3) 今でも男性に比べると女性の収入は少なく、DV被害も多い。表に出て活

躍する人への支援はもちろんだが、そうではない人への支援を今後もお願いしたい。

- (4) 国や県主催の男女参画の研修などに、市職員も市民と同じ立場で参加し、ともにレベルアップしていただきたい。

3編 やさしさ「支えあい、健やかに暮らせています」

第1章 地域の中でお互いに見守り支え合う、やさしさあふれるまち

- (1) 認知症サポーター養成講座は、地域住民を中心に受講が進んでいるが、学校や企業にも広げていくなど、もっと充実させてもいいのではないかと。多くの市民が認知症の理解をもっと深められる機会を、色々な場で広げていくことが必要。
- (2) 「多様な主体」という表現について、初めて総合計画を読んだ市民には分かりづらいのではないかと。最初の主体の後に括弧書きで補足をするなど工夫が必要かと思う。
- (3) 地域包括ケアシステムのことを述べるのであれば、概念図などを入れると市民にも分かりやすいかと思う。
- (4) 引きこもりのことは、本章に示す課題の中に含めるのであれば、言葉として出てきたほうがいいのかと思う。関係部署や県とも連携・協力して頂きたい。
- (5) 大牟田市は「高齢者に優しい福祉のまち」として注目されているが、福祉関係者以外ではまだ、このことを知らない人も多い。大牟田方式と言われるほどの有名な取組みがあるので、福祉関係者に限らず、市内外に向けたプロモーションが必要と考える。
- (6) 民生委員や児童委員に会ったことはなく、社会福祉協議会のことも知らなかった。大牟田市においてそうした方々がどのような取組みをされているかを情報発信していかないと、内々での取組みで終わっているのではないかと感じている。

第2章 生涯にわたって健康で元気に暮らせるまち

- (1) 平日時間外小児急患診療体制や休日急患診療体制の維持が難しくなってきた現状にあるが、市民はあまり知らないのではないかと危惧している。そのような状況をもっと市民に発信すべきである。
- (2) 大牟田市出身者で医者になる人材においてはかなり少ない印象だが、医者がいなくなればまちの医療が衰退すると考える。大牟田地域健康推進協議会が主催する毎年9月上旬の「みんなの健康展」のような医療情報を発信できる環境やツールはそろった市であると思うので、子どもたちが医療業界への関心を持つように上手な活用をお願いしたい。

- (3) 歯と口の健康習慣について近年注目されているので、記載した方が良いのではないか。
- (4) 健康寿命延伸のためには、スポーツ団体や医師会等との連携、また、部局を超えるなど多くの協力体制が大事だと考えているが、具体的な施策・事業があれば、そのような書き込みが必要ではないか。
- (5) 市民に、がん検診の受診率は「大変」低く深刻であることなど、実情を市民に伝えるとともに、受診率が低い原因についてもっと掘り下げる必要がある。
- (6) パートナーが病気になったときや亡くなったときに、料理ができないと苦労すると思う。特に料理をしない人が多い中高年の男性が、より料理等に関心もてるような取組みをしていただきたい。
- (7) 健康づくりや食改善の取組みにおいてが、子どもと中高年等が一緒に行える取組みを検討してはどうか。市民も子どもの意見は素直に受け入れてくれるのではないか。

第3章 高齢になっても、住み慣れた地域で安心して暮らし続けることができるまち

- (1) 大牟田市には介護施設や病院が充実しているが、介護人材不足が心配である。適切な対応を図っていただくとともに、外国人の受入れやIT・ロボットの活用を行っている施設があることをアピールするべきでないか。
- (2) 在宅医療・介護について広報誌などを活用した市民への啓発は進んでいないと考える。親が大牟田市内、子が大牟田市外に居住している場合なども多いと思うので、大牟田市は在宅医療・介護を利用しやすい環境であることをFacebookなどを活用してアピールをした方が良いのではないか。
- (3) 2025年問題が叫ばれる中、介護保険料の問題を含めて適正な制度運営を図られたい。

第4章 障害があっても、みんなと一緒に自分らしく暮らせるまち

- (1) オリンピック・パラリンピックを契機として、障害者スポーツに対する市民の関心も高まってくると思われる。障害のある方がスポーツに親しむために、義足などの支援策はなくとも、スポーツの大会の開催情報を提供するための体制は必要。
- (2) 各地で行われている「未来の運動会」なども参考に、テクノロジーを活用し、それぞれ機能する部分を動かして参加できるような仕組みづくりに取り組まれない。
- (3) 大牟田では盲導犬をはじめとした介助犬の情報があまり流れてこないと感じている。
- (4) 子どもが学んだことが親に広がることもあるので、子どもたちへの障害に

対する理解・啓発を進めていくことは重要だと考える。これまでも車椅子体験等が行なわれているが、それ以外の新しい切り口も大切だと思う。

- (5) 障害のある人の就労について市の支援などはあるか。国の助成では全然足りないという現状である。福岡市などの取組みを参考に、大牟田でも企業とのマッチングを行うような仕組みづくりを進めてほしい。

第5章 将来にわたり誰もが安定した生活を送ることができるまち

- (1) 保健所の県への移管は市民にとって大切なことであるため、市民への周知徹底を早めにしていただくよう配慮いただきたい。
- (2) 医療費抑制のため、疾病予防やレセプト点検が大事と考える。
- (3) 保護世帯は減っているとのことだが、保護に至る理由として高齢者世帯が増加しているなら、今後保護世帯は増えていくのではないか。自立支援や就労支援に向けた取組みも重要。

5編 あんしん「安心して安全に暮らせています」

第1章 事故や犯罪のない安心して暮らせるまち

- (1) (視点2) 防犯活動の充実で、大牟田保護区保護司会をはじめとするボランティア活動を支援しますと記載されているが、具体的な姿が見えない。現場レベルでの施策が見えてこないで、具体が見えやすくなるようにしていただきたい。
- (2) 安心安全まちづくり協議会の設置や暴力団追放総決起集会などをされているが形式的なものになっているような気がする。安心して過ごせるように、暴力団排除に向けて取り組んでいただきたい。
- (3) 子ども見守り隊について、非常にありがたく尊敬している。子どもたちの心の育みにも貢献していると思う。ただ、見守り隊の高齢化が進んでおり、引き継ぐ相手がいないと嘆いておられたので、何か仕組みづくりはできないか。

第2章 災害に強いまち

- (1) 災害時のことを考え、災害拠点としての庁舎整備や、避難所である地区公民館への貯水設備等の設置について、引き続き検討をお願いしたい。
- (2) 災害時は、生活物資の不足などが想定されるため、そこへの対応等も含めて、今後も引き続き近隣自治体等との応援体制について考えられたい。
- (3) 避難所の水道設備やバリアフリー化など、避難所生活がなされることを想定し、最低限の水準はクリアするようにしていただきたい。
- (4) 施策の各視点が命を優先すること大事にするということに繋がっているこ

とは理解できるが、この施策の中に「命」という言葉は出てきていないため、表現について検討されたい。

- (5) 救助活動は大切だが、消防団員等の救助者の生命も大切。災害時の対応について、時代の変化に合わせた対応をお願いしたい。
- (6) 防災のための情報発信に向け、愛情ねっとや FM たんとの活用のみならず、更なる充実に取り組みたい。

第3章 消防・救急・救助体制の充実したまち

- (1) 消防団の女性団員も火災現場に出動している。女性でも出来ることはあるため、もっと女性が消防団に入ると良い。しかし、女性消防団について、女性の理解度はまだまだ浅い。次期総合計画では女性団員についても記載するなど、「女性団員」について、より PR をし、充実していく姿勢を出してほしい。
- (2) 救急車を呼ぶべきか、病院へ行くべきかといった悩みがある際に、「#7119」や「Q 助（きゅうすけ）」を利用することは良い取組み。市民や医療機関へもっと啓発していただき、広めていただきたい。
- (3) 消防団については、昨今は火災対応のみでなく、自然災害の対応等が増えている。資機材の充実や資機材を充実した後の訓練についても、施策に記載するなど、しっかりと対応してほしい。

第4章 安全で良質な水があるまち

- (1) 水はなくてはならない大切なライフラインの一つである。断水の経験を活かした広報活動や検査業務など、通常から尽力いただいているが、今後もよろしくをお願いしたい。